



11月号

ひだまり

今月のエッセー

私と映画とカメラ



カメラを手に取ったのは大学に入ってからでした。ある映画がきっかけで、私もカメラに触れてみたいと思うようになったのです。

映画の題名は、文字にするにも恥ずかしいのですが、『ただ、君を愛してる』。カメラが趣味で人と接することが苦手な誠人、死病を患いながら誠人に思いを寄せる静流の物語。静流は誠人に近づくためにカメラを始めます。

実はこの映画、私が人生で初めて涙を流した映画でした。思い返すと丁度この頃、人生はうまくはいかないもんだとつくづく悩んだ時期だった様に思います。

「あんなことをしたい」「こんなことができる」と自分に期待をして、それに答えられない自分という存在。それに気付いた時、周りがどうこうではなく、「結局今まで私を裏切ってきたのは私なんだ」と、自分が憎くて情けなく思っていました。期待をすると、叶わない時に苦しくなる。そう思った私は少しだけ疑うことを覚えました。「私にはあんなことや、こんなことができないかもしれない」「今ある幸せも明日には消えているかもしれない」。そう思うようになった時、なぜだか「この一瞬の幸せを噛みしめよう」と思うようになりました。

この映画に出会ったとき、そんな私の心情と、命の片鱗を残そうとシャッターを切る静流が重なったように思えたのです。「明日にはもう自分はいないかもしれない」。そんな静流のシャッターはどれ程重いものだったのか。シャッターを切るその一瞬一瞬が、「生きている今」そのものを大切に焼き付けているように思えて、今ここに生きていられることに泣けてしまう私がいきました。この涙が私とカメラを繋いだのです。

◆ 畔柳公潤

私たち、こんなことをしています！

日常の研修風景より

『所外研修』

今回の研修風景は「所外研修」です。私たちは日頃から仏教をより深く理解するために様々な分野の先生からお話を聞く機会があります。講義で学んだこと、今興味があることに対して自らが企画を立て皆で研修に行きます。

私はYMCAという施設を訪問しました。この施設では主に青少年を対象に



YMCA 担当者からお話を伺う

キリスト教の理念を用いて布教教化をしています。施設の中には学生を対象とした寮や、ホテルマンを育成する専門学校があります。また、近隣の子どもたちが気軽に通うことができますようプールや書道教室があります。

いろいろな場所を訪れることで日々見聞を深めています。

◆ 寺門典宏



YMCA の使命



編集後記

カレンダーを見れば既に「立冬」を迎え、暦の上では本格的な冬に入ってきました。木枯らしや初霜、初雪といった季節の便りからも、冬の足音が聞こえます。

早朝や夕方時間帯になれば吐く息が白くなり、一日ごとに寒さが厳しくなっていくのを実感します。そんな寒さに身震いして、あれほど暑かった夏を懐かしく思います。最も、夏には逆のことを考えるのですが・・・。

気温差の激しい季節の変わり目は、病気にかかりやすい時期でもありません。今年も残りわずか、体調を崩さないよう気をつけて頑張ってくださいませよう。

◆ 中野太秀

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四



法のお話



三年度
羽賀孝行

『誓願』

誓願とは、仏道（お釈迦様の示された道）を歩もうとする者が立てる誓いのことです。よく知られている誓願に次の「四弘誓願文」があります。

衆生無辺誓願度

煩惱無尽誓願断

法門無量誓願学

仏道無上誓願成

〈意訳〉

- ・この世の中には迷える人が多くいるけれど、必ずその人たちを救済することを誓願します。
- ・私の煩惱というものは尽きることがありません。

せんが、必ずそれを断つことを誓願します。

・仏のみ教えは数限りなくありますが、必ずそれを学ぶことを誓願します。

・仏のお示しになったこの道はこの上ないもので、必ずそれを成就することを誓願します。

仏道はただ自身の悟りを目指して歩むものではありません。自身の修行は第一ですが、またそれと同時に、生きとし生けるものたちを救済していこうと志すことが肝要になるのです。「四弘誓願文」はそのことをとても分かりやすく表現しています。誓願は修行の指針となり、日々思い返すことで私たちを正しい方向へ導いてくれます。

「私はまだ二十四歳の若輩者ですが、大きな志を持ってこの世界に飛び込みました。心という面から、人の命を救いたい。それが私の誓願です。」

これは、私が出家する際にお寺の機関紙に投稿した記事の一節です。ご存知の方も

いらつしやると思いますが、私は（お寺の生まれではなく）一般家庭から出家をしました。そして出家するに当たっては、上記のような誓願を抱いていたのです。

出家当初はこの誓いを胸に精一杯努力していた私ですが、時間が経つにつれ怠け心が湧いてくることもありました。坐禅中は眠りこけ、掃除は手を抜き、読経中の心も散漫。一体何のための出家だったのか……。わからなくなることも多々ありました。しかしながら、そんな時いつも思い出されるのは先の誓いでした。

「まったく自分は何をやってるんだ！」
それまでの怠慢な修行を反省し、あるべき方向へ、また歩んでいこうという気持ちにさせてくれました。

仏教を学び、それを実践していこうとしても、初心を忘れずにいることはとても難しいことです。しかし、灯台が船舶に道を示すように、折にふれて誓願を思い返すことで、再び正しい道に戻ることができるようです。

まずは第一歩として、一日の始まりにこの「四弘誓願文」をお唱えしてみたいかがでしょうか。

身近な仏事

『葬儀』



葬儀は、国や民族、宗教・宗派によってその様式は様々ですが、「故人の尊厳を守り、冥福を祈るとともに、残された人の喪失感や悲しみを癒す一助を担う」ということにおいては、人類共通の営みと言えるでしょう。



曹洞宗の葬儀は、「始めに故人に戒を授け、仏弟子となっていたとき、最後は悟りの道へ送らせていただく」といった内容になっています。仏弟子とすることによって、故人が死後の世界に行っても安らかでありますように。との願いが込められています。

大切な人を失うことはとても悲しいことです。そして、その悲しみが簡単に消えないのは当然のことです。だからこそ、葬儀を通して故人をしっかりと見送ることは、故人にとっても、自分にとっても、一つの大きな節目となるのではないのでしょうか。葬儀を行うという際には、言葉では言い尽くせない程多くの大切な意味合いが含まれているように思います。

◆大澤香有

ひだまり寺社巡り

東京都八王子市

たかおさん『高尾山』

やくおういん『薬王院』



今月は高尾山の中腹にある「高尾山薬王院」です。東国の祈願寺として七四四年に開山され、真言宗智山派の三大本山にも数えられる名刹です。天狗信仰でも有名なお寺で、境内には大きな天狗像が祀られています。

古来より高尾山は、山に分け入り修行を行う修験道の根本道場として知られてきました。滝に打たれる水行や山中をねり歩く回峰行などが行われます。こういった修行はなかなか経験できないものではありませんが、薬王院では夏と秋の年二回、「信徒峰中修行会」という体験修行会が開催され一般にも広く門戸が開かれています。

年間二五〇万人が訪れ、世界一の登山者数を誇る高尾山。その山中全てを修行道場とする薬王院の壮大なスケールは、山を訪れる人々の心を魅了してやまないのです。

◆堀江紀宏